CO・OP
共済

全国からの支援メンバーがいてこそ 実現できた、2カ月間の訪問活動

震災直後、北海道・東北地区推進部のあるみやぎ生協・黒松店も被害が大きく、コープ共済連の現地対策本部は、みやぎ生協本部に一時移転した（その後黒松店に再度移転）。全国の生協からの支援を受け、2カ月間にわたる組合員への訪問活動の指揮をとったリーダーの話を聞いた。

共済推進本部推進統括部部長
コープ共済連東北地域対策本部長
太和田（たわだ） 昇（のぼる）さん

インフラがストップする中 現地対策本部を設置

被害の大きさを考えれば、コープ共済連だけでは訪問活動をし切れない。会員生協に参加していただき計画を組み立てようと決め、長期戦・広域エリアに対応する対策本部機能をどうつくるかが、震災直後の喫緊の課題でした。

被災地生協と話し合いを進め、異常災害見舞金の請求支援を中心とする現地方針を策定しました。3月15日には、コープ共済連本部のある千葉県浦安市から第1陣の支援部隊が到着し、水・食料の調達はもちろんですが、レンタカーの確保、緊急車両の登録、ガソリンの確保、訪問活動支援者の宿の手配など必要な作業を役割分担して進めました。翌16日に正式に現地対策本部を設置し、19日にはコープふくしま本部、29日にいわて生協本部にも契約者対応本部を立ち上げました。

3月23日に本部を黒松店の事務所に戻すと同時に、サンネット事業連合の地図システムで訪問地の地図作成作業を始め、訪問マニュアル策定やツール作成など、訪問活動の準備に取り組んでいきました。

できるだけ早く、多くの被災者を支えるための判断

われわれの使命は、できるだけ早く組合員に共済金・見舞金をお届けすること。そのため1日に30人は応援が必要で、会員生協に支援をお願いしました。コープふくしまもいわて生協も考え方は同じです。土地勘のある人も必要なので、宮城の場合はみやぎ生協の共済スタッフと、あいコープみやぎの職員に入っていただきました。その後、この現地の皆さんのご奮闘に大変助けられます。

4月3日、第3陣の応援部隊が仙台に到着し、翌日からいよいよ第1クールの訪問活動が始まりました。しかし訪問できた軒数は1日わずか47軒でした。これはショックでしたね。訪問活動は会員生協の支援のもとで行ない、5月末に終了と決まっていました。できることが限られるので、自宅全壊・半壊のかたがたがいる避難所と、一部損壊の所を中心に回ろうと計画しました。想定では3県で約2万5、000軒です。宮城では1日280軒は訪問しなければならない。皆一生懸命なんですが、なかなか効率良く動けません。お寺など40～50人の小さな避難所も全部回って、加入者がおらず、結局会えなかったと言って戻って来る。

対策本部の黒板。「明日の活動時間　9：30～19：00」と大きく記されている。

朝、チームごとに机を囲んで当日の準備をする第5クールのメンバー。「電気や水が復旧していない避難所もありました。厳しい状況下での訪問活動に参加してくれたメンバーには、本当に感謝しています」

組合員が不在の時は、加入者名や番号を確認しながらその場で受付票を書く。

小さな避難所へも行くことは尊い仕事だと思いますが、人員と時間は限られている。つらいですが、小規模避難所には行かないという判断も必要でした。困っている、より多くの組合員さんにできるだけ早く見舞金をお渡しするために、効率をもっと考えてほしいと率直に話しました。

各自の知恵と工夫を引き出す

すると、たくさんの知恵が出てきました。例えば、初日は17時帰着でした。しかしメンバーから「17時で終わったら、仕事や家の片付けで外出している組合員さんと会えない。終了時間を変えよう」という声が上がったんです。それで10時開始、19時終了に変更して、時間をより効率良く使えるようにしました。不満を言う者は一人もいませんでした。次の日から訪問軒数は飛躍的に伸びていき、1日700軒を超える日も出ました。最終的な訪問軒数は東北3県で2万6、000軒を超え、2カ月間で活動を終えるという当初計画の期日を守れました。

今後の課題は、CO・OP共済をしっかり拡大することですね。契約者の大事な掛金で共済金を支払い、剰余が出れば積み立てをすることで、通常の共済金の支払いだけでなく、こうした異常災害時に見舞金もお渡しできる。ですから、このサイクルを強めていくことです。

今回の被災は本当にひどく大変な状況ですが、この訪問活動を通して、組合員さんも支援者もあらためてCO・OP共済のお役立ちを感じていただけたのではないかと思います。CO・OP共済の使命は「助け合う」ことです。全国の仲間と一緒に、さらに輪を大きく広げていかねばなりませんね。

（文・写真　早坂恵美）

被災地より届いた組合員の声

「震災後はいろいろと物入りで、とてもありがたかったです。手頃な掛金なのに保障が良かったと実感しました」

（いわて生協）

「震災の対応でお忙しい中にもかかわらず、すぐにお見舞金を支払っていただき、とてもうれしく感激しています」

（みやぎ生協）

「長野でも大きな地震があり私も被災したのですが、すぐに職員の方が訪問してくださいました。早々に対応していただき、ありがとうございます」

（コープながの）

訪問活動を振り返って

今回の2カ月間の訪問活動には計381人が参加しました。約30人の部隊が、毎週1班ずつ大型バスで千葉県浦安市を出発し、5泊6日で活動したのです。

会員生協の協力により、災害時の共済のお役立ちをしっかりと伝え、被災地の組合員にとても喜んでいただけました。そして、全国の生協が一丸となり訪問活動に取り組んだことも、大きな成果の一つです。

被災地では、共済に入っていない組合員に「私にはお見舞金は出ないの？」と聞かれることがつらかった、という報告を多く受けました。やはり、こうした状況に備え、おすすめのお声掛けを日ごろから続けることの大切さをあらためて実感できたと思います。この教訓を共有していくことが、今後の課題となるでしょう。

（コープ共済連専務理事　今村均（いまむら ひとし））